

イデアIDEA

Tomomi Koizumi



目次

アイデア	1
------------	---

イデア

2つの水盤
星座の羅針盤
パンドラの箱
極彩色の数式

2つの白大理石からなる水盤の左の柱身には、目の閉じられたイルカと緑色の竜の斑点、右の柱身には、実りの無い花綱が交互に彩られて、4匹の怪獣の異なる足で支えられている。その太い足元には、まったく表情のない数人の男女が鎖でつながれ、丸い果実が熟れるままに。

水滴が迸る桃色の水盤には、セピア色のあこや貝殻と魚、棕櫚の葉、蛇をつかむ鷺が飾られて、この神聖な場所から生まれてくる愛の対話。

もしも語り聴く言葉が分り合えなければ、愛によって分り合おう。

一方は認識と思い出。

もう片方は、無知と忘却。

いばらのとげとげと、緑々と生い茂る葉の悦楽には、異わりのない事を識る。

もしも、この嘆きを増えるままにしたら？

勿論、この愛もまた倍になるのであれば。

苦しみ。哀しみ。そして、苦痛の繰りかえし。

どうして、こんなにも、記憶と目に映る世界の異わりの中で、気持ちが揺らいでしまうのか？

密接に近づいては、遠のいて、まるでうまく混ざり合わない水と葡萄酒のように、二人の会話は合わさってゆく。

光と温かさは、こうして繋ぎ合わされてゆく。

あいてには、いきいきとした活動力があり、悲嘆から悲嘆が連帯しては、いたわってくればそれなりに嘆きは深まっていってしまう。

うとうとと眠りに堕ちて、うとうととまたまどろんでしまい、こうして深い眠りに惑わされないように、記憶から外されないように。

ただ、ひたすらに泣くままに。

愛によって生かされ、
愛によって呼吸をして、
愛によって創られて、
愛によって養われて、
愛によってつながり、
愛によって訪れて、
愛によってここを去り、
愛によって、また生まれてゆく。

善きものを、永久に所有せんとする人間の欲求は、ついには、麗しきものを分娩する出産女神の役を成し、魂、肉体、そして、聖堂の音の感覚はとても重要であって、銀梅花の薫り高き花冠を頭上に飾っているキューピッドの背後には、火花が勢いよく跳ね上がる信仰があり、希望という偉大な存在にうっとりするまま、天上へとそのまま向けられる視線の彼方、その両掌いっぱいに掲げられた花籠、その華はのちに、実りをもたらすものとしての明るさとして映る。

その脇には、天から祝別された仲睦まじい夫婦がおり、優しい夫の両腕に抱きかかえられたままの妻の斜め越しの眼差しは、深く、実に、物憂く、メランコリア。

この世におけるすべてのはかなさは、キューピッドの額に巻かれた雉の羽に。

二度軽やかに瞼を閉じた妻の足元の脆く、か弱い硝子玉は、この世における不安と虚栄すべてであり、完全なる丸い球体は宇宙におけるハーモニア、苛立ちから果てしなく遠い。

死と宿命から、この顕世の人間達がどこにも逃げられないことは、目隠しされたキューピッドの眼帯の、黄金、濃茶、赤茶、緋、そして碧のかかった濃緑色…。

まず太陽、彗星、そして流星群。

艶やかで大きな星は、まず東より西に流れ落ちてゆき、東の方の天空に赤き印ある。陽はますます明るし。

こんな盲目的な愛は、地上のありとあらゆる感覚的な悦楽や視覚的なものを頑なに拒んで受け入れず、最後には一切、愛という嬉々とした充実感は合理的な思考を追い出してしまった。

キューピッドの両翼は派手やかに目を惹き、近寄ってみると、その色彩は意外にも無色に近く、ほとんど灰色、純白、そして黄土色である。

背中に生えた小さな翼は、軽やかなはち鳥のように鮮やかに輝き、この視覚的な美しさ、聴覚的な喜び。

それゆえに、私たちは美神にむかって、この盲目のキューピッドの目が冴え冴えと開くように、祈りをささげよう。

一気に放たれた愛の矢は、情熱の名にふさわしく、緩やかに円弧を描いては、無茶苦茶に飛んでゆく。

人差し指と中指の二本線で、瞼をそっとなぞってゆけば、もういつ、このまどろみから覚めても悔いはない。

遠くから鹿のキューという鳴き声と、こんもりとした茂みから小さい昆虫達は、その象を見せては、さまざまなかたちの影を彩どってゆくようだ。

「なんじ、土より出でし者、
土に帰るべきものなることを思え。」

すきま風が、窓枠の歪みから睦むように流れては、その揺らぎに涙が溢れ出て来る。
ようやく心に留められることは、この一刻一刻と、紡がれる命という生の輝きのなか、残念ながら死の影が近づいていること。

1つ、どうか、その神性、正義、強欲。
2つ、なにか、偉大さ、天使、慎重。
3つ、なにの、天、勇敢と色欲。
4つ、どうして、人間、節約、傲慢。
5つ、どれだけ、想像力、信仰、怠情。
6つ、なにか、感覚能力、希望、哲学。
7つ、いつ、生命力、博愛、傲慢。
8つ、どこ、元素力、忍耐、虚像。
9つ、どのように、サイコロ遊び、慈悲、軽兆。
そして10は、そのすべての質問から導かれて、2つの端点で創られてゆく、解答という究極のパーフェクト。

パンドラ。
水と土で創られた女神の誕生。
すべての人々の恩恵 (Omnimunus)
すべてからの制約 (Omniminus)
すべてを与えることのできる地上の女神でありながら、すべてを贈られる女神ではない。
よく磨き、繊細に彫り込まれた、水晶の宝石箱を右手に持ち、左手には、青麦と、聖な

る啓示を象徴する、葉で詰まった籠を抱えている。

もくもくと煙があふれかえるなか、あらたに希望の女性として生まれ変わったパンドラは、死と切り離された武器を地面へと落とし、つま先で真っ二つに折れた槍をへし折ってしまった。

稲妻のようにジグザグにひびの入った大きな水瓶から、赤葡萄酒、オリーブオイル、その他の高価な薔薇の精油、香料が豊かな土壌となるように、吸い込まれてゆく。

この大瓶の底に最後まで残った希望は、外へと逃げ出さないように固く蓋で閉じられている。

ぶんぶん飛び交う蜜蜂の巣からは、木漏れ日のような黄金の蜜が流れ出し、パンドラがそろそろと箱を開けようとするしぐさは、けっして穏やかななものではない。

この非合理的な力、この非合理的な魂。

この現し世のゆらぎは、ちらちらとまわりついてくる光によって満たされるように。

パンドラは、その長く深いまどろみからゆっくりと目覚めて、両腕を伸ばして欠伸をして、光輝く庭園の中央に植えられた、八角形の生命の樹のたくましい根、迷路のように折り重なっている枝の発達を象徴している。

檸檬の樹、葡萄の樹、そして、ナツメヤシの樹の樹海の迷路。

密やかに、足指を濡らしてくるのは、樹の向こう側にある川からのさざ波の誘い。

川岸の堤防は、荒れ狂う水流をせき止めて、いよいよ水の勢いは、魂もこの水流と同じようなものであって、清められ、少しずつ完璧へと磨かれてゆく。

魂は、決して到着することなく、ただ流れの強くて速い大流へと、放出されるのみ。

舟もなく、すべての交通手段が断たれてしまえば、旅する人々はおろおろと立ちどまってしまう、前進することは出来ないであろう。

この川岸は深いように見えて、浅瀬であって、水中に漂う美しい光の反射。

深い水底に、おぼろげに消えてゆくその影。

肉体ではなく、その魂が深く深く、暗い深淵へと沈んでゆく。
なんと、おそろしいことか。

ようやく、川岸を乗り越えて、その丘を踏んでゆくと、精神と物質、無限と限度、無形と形式、感情と理性が、交差する柱としてそびえ立つ、色彩の変容と、光の強調性ある、円柱の光景が見えてくる。
美は偉大であり、偉大なものは善であること。
円を成して、配置と均整を探求して、差、合一、反は、完全に一致することに。

おそらく、愛はすべてをくつがえす力そのもの。相差、障害のはじまり、途中、そして、終末へ。
持続性と無窮性。

「どこに」行くの？
「いつ」来たの？
「どうして」一緒にいるつもり？
望むのであれば、「いつでも」、「どこでも」。

朝焼けとともに目覚めて、
はるかなる道を乗り越えて、訪れる群集にすれ違っては、いったい「どのように」、ここへと来たのか問いている。

「どうして」、「どのくらい前から」、あなたの心から愛する対象が思い出せないのかしら？
忘れてしまうことの悲嘆や、涙にむせびながら、愛の扉の鍵は、欲望そして、敬意の情によってたかめられてゆき、とても難解で複雑な、悔悟の念、または充実感、視野、視覚、聴力によって形成して、記憶と忘却、生と死の天空とは、草木一本生えていない灼熱の道行きに過ぎない。

激しい雷鳴が轟いて、暴風と雨に大地が揺れ動いて、流星が交互しながら、天の川へと流れてゆくまで。

魂はおそらく不死であって、あらゆる悪をも忍び耐えることにあるので、いかに「死の旅路」であっても、希望は捨てられない。

この魂と愛の複雑な闘争を超克して、怯えていた私の元に訪れた運命的な美しい出逢いに、真紅の衣をまとして、こちらへと向かわせる。
この恩寵の極致をみた思いにさせる。

こうして、今しがた口よりつぶやいた祈りの言葉を向こう側のあなたとともに聞いてみたい。

アイデアIDEA

著 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
